

【中学生の部】

◎日本動物福祉協会 一等賞 三浦 かな(みうら かな)

「愛される命」

「どうして？まだ生きているのに…」当時小学生の私は、安楽死を理解出来なかった。

ジニーは、昔からカナダのグランパの家にいる犬だ。ラブラドルでジンジャー色だからジニーという名前。十四歳のおばあちゃん犬で、おとなしくて私達にいつでも背中をなでさせてくれた。いつも一緒にお散歩していたのに、だんだん元気がなくなってきて、寝てばかりいるようになった。お医者さんに診てもらったらガンだった。もう手の施しようがないそうだ。ある日、グランマが言った。「今週の金曜日、ジニーとお別れすることにしたの。だから、それまで一緒にお散歩に行って、たくさんなでてあげてね。」グランマが話している間、グランパは違う部屋にいた。この会話を聞かないようにしているみたい。「死ぬ日を私たちが決めるの？」私は驚いて母に聞いた。「そう。グランパとグランマがジニーのために決めたの。」私は納得できなかった。ジニーはまだ生きています。それなのにどうして殺してしまうの？

木曜日、私はグランパと一緒にジニーの散歩に行った。私達が良く散歩した公園に差しかけると、ジニーは走りだした。まるで健康な時に戻ったみたいに。でも、家に帰るとジニーの息が荒くなり、ぐったりと転がって起き上がってこなかった。私はずっと、ずっとジニーの頭をなでていた。

土曜日、グランパの家に行った。いつものように床にカタカタと爪があたって玄関に近づいて来る音は聞こえなかった。ガランとした家には、もうジニーの姿はなかった。

三年後、新しい犬が来た。今回グランパの家に来た犬はグレイシー。黒と白のミックスで、虐待を受け続けて保護された犬。余生をゆっくり幸せに過ごしてもらうために受け入れるという。グランマがその虐待の内容を話そうとすると涙が出て話せなくなる程辛い経験をしてきた。女性から虐待を受けていたので、グランマには近づかず私達も数日間は近づくことが出来なかった。もう虐待されていたのは一年以上前なのに彼女の心の中に深い傷となっていた。私達が急に大きな声を出したり、手を上げると震えてグランパのところへ逃げる。グレイシーの心の痛みは、完全には消えないけれど、グランパとの楽しい思い出が増えて少しずつ良くなってきている。グレイシーは絶対幸せになれる。

私は、グランパの病気のことを思い出した。私が幼児のころ、グランパはステージ四、ジニーと同じガンになった。もうダメかもしれないとグランマから何度もメールが来たが、奇跡的に合う薬が見つかりグランパは今も元気に過ごしている。その時グランパは言っていた。「自分はまだ若いから治療をしたけど、これ以上の痛みがあるのかと何度も負けそうになる程苦しくて痛かった。」辛い治療を乗り越えて、本当の痛みや苦しみを知っているグランパだからこそ老衰に近いジニーを楽にしてあげることが出来たのだと思う。

今になって私はグランパの選択を理解できた。グランパがジニーにした選択は命を尊重すること。元飼い主がグレイシーにしたことは、命を傷つけること。私が住む北海道だけでも、年間

千頭以上の犬猫が飼育放棄等により保護され、その約一割が殺処分されている。殺処分と安楽死は結果は同じ死だが全く意味が違う。殺処分は、命を粗末にされた結果であり、安楽死は愛された結果だと今の私は考える。一匹でも多くの動物が幸せに生きて幸せな最期を迎えられる世の中になって欲しい。

私は北海道が動物愛護推進員を募集していることを知った。動物愛護や正しい飼い方について理解を深める活動を担う。私も大人になったらやってみたい。それまでは愛された命が増えるよう、自分の体験を伝えたい。

私の大好きなグランパは動物の気持ちを理解してこれからも、動物達と生きていく。